050　安威川　080622

◎安威川に来ている、時間は午後3時半。この時期になると、快晴ならば日照りが熱い、なるべく時間をずらして涼しくなるのを待っている。今は、6月初旬、空を見上げると、青空の中に雲がいっぱい、その雲は元気で頑張っている白いにょきにょき雲だけれど、その裏側は薄いグレーであり、やや濃いグレーであり、そいつらがひとたび暴れ出すとすぐに雨になりそうと想像される。そんな青空と白いにょきにょき雲と雨になりそうな雲が空をぐるり一周している。まだ近畿地方の梅雨宣言は無いが、関東は一二日前に梅雨に入りましたと言っていたような気がする。いよいよ雨の多い季節、むんむんした暑い風、身体がだるいね、オレはこの季節、毎年だるいねと言っている。

◎土手のそばで大きな建物の工事をやっている。去年もその近くで大きなトラックターミナルビルが完成していた。コロナの真っ最中の完成でトラックが動くかなと見ていたが、それなりに稼働している。今回の工事は2階建てのコンクリート建物を半年ほどかけて解体した更地に基礎工事が始まり、コンクリートの柱が何十本と突き出てきた。この工事は中央市場の中の建物、トラックターミナルと同じぐらいの規模の大きさかもしれない。背の高いクレーン車が3本も立っている、クレーン車の足元はキャタピラーだ。あの柱の、梁やら、床やらは、どうするんだろうなと観察していると、翌日には何本かの鉄骨の梁が付いている。四角い柱の2階部分に四角い鉄骨の筒が付いて、そこに梁をくっつけている。床は土手の方からは見えないが現場の職人がすたすた歩いているところを見ると、すでに平らかな地面ができているようだ。そうだ、柱を造る時は、柱の形の鉄筋の束をクレーンで吊り上げ添え付け、その回りに木製の板をクレーンで吊り上げ添え付け、四角く組んでコンクリートを流し込んでいる。そのコンクリート用のバケツが先日床に置かれていた、その傍に乗用車がいた。大きさは同じくらいだね、車ぐらいのバケツにコンクリートを入れて空まで吊り上げ、徐々に下ろしてコンクリート打ちをしている。さすがに山の中のダム現場を見たことがないが、そのスケールがもっとすごいと想像される。オレはこういう現場を見るのが好きだねえ、建物も土木も見ていて飽きないね。走るのをストップしてクレーンの動きを見ていた。

◎二日ほど前の夜なかに屋根に当たる雨音で目が覚めるほどの勢いで降っていたが、翌日の河原は多少水が多いくらいだったので、雨の量はさほど多くなかったのだろう。この河川敷も雨の翌日とはいえ水溜まりもなく走れるぞと進んでいたが、だんだん水溜まりが出てきて、そこに泥が溜まっている。今日は汚れてもいい古い靴でやって来たが、その古い靴は底の溝がまったくなくなってつるつる、そんなつるつる靴で泥の上に乗ると、「あ　れれのれ」つるリもう少しで滑ってこけそうになったので、土手の上にあがって進んだ。

◎今日はちょっと水嵩が多いかな、横の下水処理場の水門や、横の川からの水門が開いて、安威川にちゃぷちゃぷ水が流れ込んでいる。とはいえまだ中の島が見える、たいした水嵩ではない。「おお　ヌートリア」キャツめ、草を喰っているのか、土手の方にやって来た時には土を掘っているが、喰っているのはミミズなのか草の根なのか、齧歯目は肉食かと思っていたが・・。＜ヌートリアは草食性です＞ヌートリアは南米から毛皮を獲るために世界各地で導入されたらしい。日本にも戦前にやって来たらしいが、その子孫たちがいま繁殖している。寒冷地が苦手らしく中国地方を中心に外来種として増えているらしい。この安威川でも初めて見たのは20年ぐらい前かな、今ではここにやってくると一日に少なくとも一回はお目にかかれる。

◎生き物たち同士の闘争はまだお目にかからない。たまに鳥の羽根が散乱しているところを見つける。「お　やられたね　喰ったのは　どなたかな」ヌートリアも、サギも、カモも、近所に固まってふわりとしている。カラスもハトも、飛び回っているが争わない。カラス同士が追いかけあいをしているが、これも遊びか、喧嘩か、すぐにやめてしまう。

051　安威川　090622

◎昨日の続きです。雨が降ると河川敷の遊歩道に水溜まりができる、上流から流れてきた泥がどろどろになっている、靴が汚れる、つるリ滑って危ない、ということで前日は土手に上がって先に進んだ。今日は乾いている、きれいな靴でも汚れない。ただ心配なのはもう少し先の部分、そこはいつも湿っている、いつもドロドロ、しかも両サイドが草ぼうぼう、その草の上には踏み跡があるが、草ぼうぼうの中の踏み跡、地面は見えない、靴が濡れる、蛇でも踏んだら気持ちが悪い、もうすぐだ、なんて思いながら進んでいった。

◎毎日毎日の安威川河川敷だけれど、時には驚きの発見がある。今日の発見は、喜びは、「なんと　いつものドロドロの場所が　草刈りされているではないか　おお　これは驚き」遊歩道はまだ乾ききっていたい半ドロ状態、なので苅たての草の上を難なく通り過ぎた。

◎河川敷の草刈りは毎年、夏の前後に2回ぐらいやっているようだ。川の底浚えの工事は大阪府がやっているようだが、草刈は茨木市がやっているようだ。最近、オレが走っている場所は摂津市にもまたがっている。「なんと　いつものドロドロの場所が」といったところは摂津市だ。話がそれたが、土手の草刈りが終わると気持ちがいい、動きやすい、きれいだ、ありがたい限りである。

◎もう一つの驚きの話。いつもは河原で1時間ほど走ったあとでストレッチをしているが、その日は暮れそうな時間、いつものところまで行くと暗くなる、まだ明るい今のうちにここでストレッチをしようとベンチに七つ道具を置いた。ここは、安威川と大正川の二股地点、七つ道具とはいえポケットの水をぐいと飲んで空ボトルを、腕時計を、腰に巻いた上着を置いた。“わっせい・どっこいしょ・こらしょ”かけ声は山に登る時と同じである。腕立て伏せ、体をねじる、前へ、後へ、横へ。しゃがむ、立つの繰り返し。ベンチに寝転がって空を見ながら足を上げる、こらさあ。いつものようにストレッチをしながら大正川を見ていた。「あれれ逆流している　水嵩が増えて　いっている」コンクリートのブロックが、ひとつふたつと水に浸かりだした。「え　まさか　潮の関係・・」これを調べたがわからない、「ま　いいか」と画面を閉じた。こんなところで川の水が上流に向かって流れるとは驚き、不思議、解決を願わずに、この話はこれで終わるとしよう。このあたりから大阪湾まで直線距離で、20キロぐらいのものだ。

◎先日、「カーキ色　どんな色」「ううむ　国防色　それどんな色」色には毎日接しているのだけれど、絵の具の色なら、その性質から、扱いやすさから、その色の強さや重さや透明感までいろいろ知っている。服の色や、昔からいいふるされた色の名前は、想像しながら、知っているような顔をして、皆さんと話をしている。カーキ色とは土染め色だそうだ。土の色はグレーを中心に、赤や青や黄やが混ざる色もあるということらしい。カーキ：khaki：土埃：主として軍服に用いられる色を指す。カーキ色は黄土色だと思っていたが、土の色と聞けば様々な色合いが頭に浮かんでくる。“布の色の名前”で検索すると青系統で“なまり色”グレーにわずかのブルーが入っているかな。“わすれなぐさ色”グレーにブルーを混ぜた色。書き出したが、どんどん出てくる、今更ながらに忘れることにしよう。

◎やっとコロナも終焉かな、いまだにほとんどの人がマスクをして出歩いているが、徐々に元に戻っていくような気がする。今で2年半ぐらいの時間が経ったが、少しずつ終わっていくのを願っている。そんなややこしい時期に、ロシアがウクライナに攻め込んだ。ロシアとウクライナは同じソ連の国、ソ連がなくなったとはいえ同胞だと思っていたが、過去の歴史をちらほら見聞きすると、隣の国同士はなんじゃかじゃ、愛憎のもつれがあるらしい。ただ、ロシアのプーチン、軍隊を動かして、殺戮、破壊、略奪・・よくまあこんな時代に、こんなことを・・。

052　古事記　100622
三浦祐之著＜古事記を旅する：ヒスイの郷の女神　羽咋から糸魚川へ＞
◎先生：能登に限らず、日本海側の各地に、アメノヒボコ・・など、海のかなたから訪れる神の伝承が多い。そしてその象徴的な存在が、古事記や出雲風土記で国造りの神と伝えられるオホクニヌシである。この神は、古事記では、オホナムジ・ヤチホコなどの別名を持ち、出雲風土記では、「天の下造らしし大神　大穴持命（オホナモチノミコト）」と呼ばれている。

◎オオクニヌシ（この時はヤチホコと呼ばれる）が、ヌナカハヒメを求めて、出雲から越後の国に行った。
◎「此のヤチホコ神、高志の国の沼河比売を婚（ま）かむと、行幸（いでま）しし時、その沼河比売の家に至りて、歌ひて曰く・・」歌が続く。
◎ヌナカワ（玉の川）が、硬玉翡翠に由来するというのが明らかになったのが、1955 年以降である。縄文時代からヒスイが呪力を持つ装飾品として使われていたことは知られていたが、日本列島で翡翠が産出していたとは考えられていなかった、大陸渡来と思われていた。ところが姫川の支流、小滝川がヒスイの原石の産地であることを発見した。その後、長者ヶ原遺跡・寺地遺跡などで、縄文時代の大がかりな翡翠工房跡が見つかり、世界最古の翡翠加工の中心地であったと判明した。
◎現在でも奥の方に何十トンもの翡翠原石がごろごろ転がっているらしいが、天然記念物に指定されているし、素人では、どれが翡翠原石かわからないらしい。

◎ヤチホコがヌナカハヒメを口説きに行った時の歌は有名でなかなかに好ましい。万葉集にもヌナカワの歌がある。玉をひらった、その素晴らしい玉のようなあなたが、老てくるのは惜しいことだ、という歌だ。

沼名川の　底なる玉　求めて　得し玉かも
拾（ひり）ひて　得し玉かも
惜（あたら）しき　君が　老ゆらく惜しも

◎長者ヶ原遺跡・寺地遺跡：5000 年～3500 年前の縄文遺跡はヒスの加工地だったという。地図で調べると海まで 2 キロぐらいの場所だ。当時の縄文人は糸魚川の下流に流れ着いたヒスイの小さいクズ石を磨いて装飾品に加工していたということだ。オレが少年時代に再発見されたヒスイの岩石がゴロゴロしているのは、もっと上流、海から川に沿って 15 キロほど内陸のあたりだそうだ。

◎糸魚川にはふたつ想い出がある。40 歳の頃、故阪口さんと白馬岳に登った。初めての信州の山だったと思う。列車で糸魚川から大糸線に乗り換え山に登ったが、帰りの日、列車の時間待ちで糸魚川駅から歩いて海岸まで行き、砂浜を散歩した。帰りの列車に乗り雪を被ったアルプスを見ながら、「いやあ　よかった　また行きたい」それを聞いて、「ああ　しんどい　しばらく行きたくないな・・」とも言えず笑っていたが、今のオレは、「すぐに行きたい」という人になってしまった。
◎その山、オレが初心者ということで、白馬大池から小蓮華山まで行った。季節は GW ころで、尾根道の手前、雪の上でテント泊だった。翌朝、青い空、初めての尾根に尖った雪、あれには感動した、こんな世界があるのかと震えあがった。同じように歩いている二人組がいた。「実は　仲間を　探してます・・」彼らが先に登り、我々も少し遅れて歩いていると、二人が止まっていた。「発見しましたが　別の人でした」亡くなっていたのは、我々と同年配の男性、ツエルトの中で横たわっていた。吹雪の中、白馬岳からスキーで急いでいたが、吹雪で視界が効かなくなり、ちょっとやり過ごそうとツエルトで休んでいて、そのまま死んでしまったのかな。後ほど、38 歳の四国の人だと知れた。

053　古事記　110622

出雲のオオクニヌシ：この時の名前はヤチホコ、が新潟県糸魚川にヌナカワヒメといういい女がいるので、娶りにやって来た。一日目は中に入れてもらえず歌を贈った。返歌が来た。その翌日二人は結ばれた。

やちほこの　神のみことは　　ヤチホコの　神と呼ばれるわれは
やしまくに　妻まきかねて　　治める国に　似合いの妻はいない
とほとほし　こしの国に　　遠い遠い　越の国には
さかしめを　ありと聞かして　　すぐれた女が　いると聞かれて
くはしめを　ありと聞こして　　美しい女が　いると聞かれて
さよばひに　あり立たし　　妻を求めて　お立ちになって
よばひに　　ありかよはせ　　妻問いに　遠くもいとわずお通いになり
たちがをも　いまだとかずて　　太刀の紐さえ　解くのももどかしく
おすひをも　いまだとかねば　　旅の衣を　脱ぐこともせず
をとめの　　なすやいたとを　　乙女ごの　お眠りになる板の戸を
押そぶらひ　わが立たせれば　　ガタンガタンと押し続け　わが立ちなさると
引こづらひ　わが立たせれば　　グイグイと引き　わが立ちなさると
あをやまに　ぬえは鳴きぬ　　夜も更けて青い山には　ヌエめが泣いた
さのつとり　きぎしはとよむ　　時は経て　野中の雉が声響かせる
にはつとり　かけは鳴く　　にわのニワトリ　夜明けを告げる
うれたくも　鳴くなるとりか　　憎い奴らだ　うるさい鳥どもめ
このとりも　打ちやめこせね　　こんな鳥など　叩きのめして息の根止める
いしたふや　あまはせづかひ　　つき従う　天をも駆ける伴たちよ
ことの　語りごとも　こをば　　お語りいたすは　かくのごとくに

やちほこの　神のみこと　　ヤチホコの神様
ぬえくさの　めにしあれば　　なよやかな草のような女ですから
わが心　うすらの鳥ぞ　　わたしの心は　入り江の鳥
いまこそは　わどりにあらめ　　今は　我が家の鳥ですが
のちは　などりにあらむ　　のちに　あなたの鳥になりますものを
いのちは　なしせたまひそ　　鳥の命を　死なせないで
いしたふや　あまはせづかひ　　使い走りのものが　伝え聞く
ことの　かたりごとも　これをば　　ことの語り伝えは　かようでございます

あおやまに　ひかくらば　　青い山に日が隠れたら
ぬばたまの　夜はいでなむ　　夜になったら
あさひの　えみさかえきて　　朝日のような笑みを浮かべておいでになり
たくづのの　しろきただむき　　わたしの白い腕や
あわゆきの　わかやるむねを　　淡雪のような胸を
そだたき　たたきまながり　　優しく撫でて　愛おしんで
またまで　たまでさしまき　　玉のような美しい手で手枕をして
ももながに　いはなさむを　　足を延ばして　あなたはお休みになれましょう
いはなさむを　あやに　なこいきこし　やちほこの神の命　　今は無暗に恋焦がれますな　ヤチホコの神よ

054　足痛い　120622

◎1週間前の朝、起きると足が痛い、「なんだろう」ぐらいで普通に過ごしていた。昼頃にじっくり見ると、左足幅広部分の内側、骨のところかポツリ赤くなっている。「なんだこれ」ぐらいで意に介さなかった。

◎足親指の付け根の部分、靴が当たるところ、調べると“母趾中足骨”となっている。女性の会話で、外反母趾とよく聞く、足が変形している方をよく見かける、この骨が変形してのことだったのだ。

◎昼飯を喰って、そんなことも忘れ、いつものように安威川河川敷に行った。ただその日は前日に雨が降ったので、汚れてもいい、履き古した靴でいつものように爽快な時間を過ごした。ところがその翌日、「今日はきれいな靴で　大丈夫だろう」と河川敷を走っていた。走ると言っても、「おまえのは　ジョギングじゃないウオーキングだよ」と皆さんから揶揄されるように、早足で散歩している中年オヤジに追いつけないスピードである。きれいな靴は一週間位履いている、ネットで3000円代で買った今風のきれいな靴。二三日前に紐を固く締めなおしたのがいけないのか、なんだか足が痛くなってきた、「ええええ　こらあ　おかしい　だめだ」　途中でいつものようにストレッチをして、靴のひもを緩め帰ろうとしたが、ゆっくりとしか歩けない。ヒザが痛い頃、びっこを引いて歩いた記憶がよみがえる。

◎二日前のポツリ赤いところが、大きくなっている、痛い、腫れている、これはなんだ・・。ヒザをやったことを思いだした。調べると、6年前、2016年10月、福井県勝山市の“東山いこいの森”のコテージに3泊して、取立山・経ヶ岳を楽しんだ。ヒザはその10年前ぐらいから何度か痛めていたが、たいしたこともなく登っていた。昼過ぎに、東山いこいの森につき、弁当を喰って、「ちょっと散歩に　取立山へ」と時計回りに歩き出した。水場の岩を登るところで右ヒザに違和感を感じたがそのまま進んだ。10月は日暮れが早い、夕方の暗く赤い太陽を見ながら降り、コテージで旨いものを喰って一杯飲んだ。「痛み止め　と　シップがあるよ」増谷さんにそれらをもらい、翌日は朝から一日かけて経ヶ岳を楽しみ、温泉に浸かってその日も、コテージで旨いものを喰って一杯飲んだ。

◎帰って、隣のかん整形でひざに注射をしてもらい、二三日普通に過ごしていたが、なかなか治らない。「医者のいうことは　聞かないと　いけませんぞ」ヒザが治りきるまで2年ほどかかった、「自分で治す、自力でなんとかする　オレは　医者嫌い」これがいけなかった。

◎今回は早速、隣のかん整形に駆け込んだ。「あ　腫れてるね　薬で　注射するほどでも　ないかな　注射すると　早く治るけど・・」と一週間分の薬をもらった。翌日になると、腫れと痛みがましてきた。「これはあかん　注射をしてもらおう」すぐに行った。なんと注射は患部のいちばん痛いところに、これには思わずこぶしを握り締めたね、痛い注射だ。それと30分ぐらいの点滴。「明日も来て」同じ注射を二日間してもらった。帰って足を見ると、ますます腫れている、くるぶしのあたりまで腫れぼったい。

◎翌日、「あれれ　ちょっと歩けるかな」古い靴を履いていつもの河原をびっこを引きながらゆっくり30分ぐらい歩いた。

◎次の日の朝、「さすが注射　腫れがだいぶ引いて、右足の形に近くなってきている。今日は大阪方面へ電車に乗って展覧会を見に行く約束をしている。3時間革靴を履いてほとんど座ることもなく時間が過ごせた。あと何日で完治するか、早く安威川河川敷に行きたいものだ。「展覧会は・・？」「あれは　アカン・・」

055　ストロボ　160622

◎カメラマンのＮさんが、「ガンガン使ってきたもの　棄てるとなると　涙がちょちょぎれる　もらってくれんか　絵の撮影に使えんか・・」スタジオに行くとでっかいバッテリーが３個、ライトが５個、三脚が数本、太いコードが幾本と並んでいる。いずれにしろ、「Ｎさんが歩くのに邪魔になる　早く片付けないと」とあわて連絡をして、我がアトリエに運んだ。この設備は何度か見たことがある。かつて、プロのカメラマンがアトリエにやって来て、絵やらアトリエ風景やらを撮影した折、「ばしゃ　ぼしょ」すごい閃光が光り撮影が一瞬にして終わっていた。おそらく車が帰るぐらいの値段の設備だと思う、無料でいただくのは忍びないが、ありがたくいただくことにした。

◎「ばしゃ　ぼしょ」の設備一式が、我がアトリエにやって来たが、「これ　オレに　使いこなせるか」「オレにとって　必要か」頭をひねりながら眺めていた。運びに行ったときに、「この線とこの線　次に　これとこれ　あとは　これを押せば　光る」「ばしゃ　ぼしょ」実演してくれたが一度聞いただけではなにがなにやらまったく頭に入ってない。かってに線をつないでボタンを押して、「ばしゃ　ぼしょ」が「ぼか～ん」と爆発でもしたら、変なところを触って感電でもしたら、とにかく心配だ。

◎普通、一眼レフの高級機には、フラッシュをつなぐ差し込み口が付いているらしい。オレがもっているニコンＤ7000にはその口がない。後継機のＤ7500には付いているらしい。調べ、別売りの差し込み口をネットで購入した、1300円也。

◎その後オレ自身の、足痛があり時間が経った。「実地に教えて　この機械は　ちんぷんかんぷん」運んだ機材一式をまた車に積み込みＮスタジオにやって来た。

◎この機械は、「スタジオ用ストロボ」という。

◎車のバッテリーに形状が似ているが、箱はコンデンサー：変圧器：家庭用100Ｖをこの箱の中で１万Ｖ～３万Ｖに変電する。

◎ストロボヘッド：発光部：電球やライトではなく、「ガスが放電する」タングステンは金属の粉。

◎緑色のコード、コンセントを差し込む。反対側の端子をＶＥ2400に挿入。

◎黒色のコード、ヘッドとコンデンサーをつなぐ。コードの赤い端子をヘッドに、黒い端子をコンデンサーに。Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ　４個の口がある。Ａ～Ｃがいい。Ｄは少し電圧が小さいので無視。

◎電源スイッチをＯＮ。　スタートを押す。ＦＬＡＳＨを押す。音楽を押すとりりりと鳴る。赤いランプが光る。ウサギマークは充電の時間短縮になるが、コンデンサーに悪影響を与えるので使用禁止。

◎ヘッドに下部にスイッチがあり、ＯＮにすると、中心のライトが灯る。

◎光量調節つまみ。

◎傘をヘッドの先端に付け反対向ける。光が拡散して、柔らかい、ぼやけた明るさがえられる。

◎終わる時は、スタートを押す。フラッシュを押す。コンデンサーが冷えるまで５分待つ。ＯＮスイッチを切る。それぞれのコードを外す。

◎カメラは、基本的に太陽光できれいに写る。このストロボも太陽光に近い光の色がえられる。

◎新聞紙大ぐらいまではヘッドは一頭でいい。それ以上大きくなると、両サイドに二～四頭。位置は30度ぐらいの斜め方向。

056　古事記　190622
三浦祐之
◎「ずたずたに切り刻んで殺す」古事記の中にこんな凄惨な場面が・・。
◎クマソタケル：宴席で酔った兄の襟首をつかむと胸に短剣を突き刺し通して殺します。そして逃げる弟のクマソタケルをつかまえると、背中の皮をつかんで剣を尻から刺し通し、ヤマトタケルの名を与えるというのを聞き終えるやいなや、ヲウスは、「まるでよく熟れたウリを切り刻むがごとく　クマソタケルの身体をずたずたに切り刻んで」殺してしまいます。
◎ヲウスが兄のオホウスを殺した時も手足をバラバラにしてしまいます。
◎スサノオもオロチをずたずたに切り刻んでいます。
◎環境考古学の松井章：弥生時代の鳥取：青谷上寺地遺跡や、縄文時代の高知：居徳遺跡の人骨に、肉体の解体による殺傷痕が見られる。鋭利な刃物で切断した傷跡や、鈍器で傷つけられた傷跡残っている。
◎想定：敵を殺した場合、ただ殺しただけでは復活の恐れがあるので、それを防ぐため、殺した肉体をバラバラにする必要があったのでは・・。
◎今ウクライナとロシアで戦争状態が続いている。どこまでが本当の話かわからないが、「ロシア軍は残忍　拷問も　殺し方も残酷　ウクライナだけでなく　中東でも」と聞く。自身も含め、「人同士が争いを始めると徐々に　残忍に　残酷に　なるのかもしれない　平時の感覚では　計り知れないのかもしれない」

◎ヤマトタケルは知恵がある、英雄には知恵が必要だ。強い相手と戦う時には、裏工作、事前準備などに知恵を絞って敵と戦い、敵を破るのが英雄。ヤマトタケルが、イズモタケルを殺した話、これは知恵を通り越して、ずるいと判断されるのでは・・。日本書記には、イズモタケルの討伐譚は語られない。日本書記がこの伝承を取り込まなかった理由について、自らを制御できない英雄、ヤマトタケルにとってもこの伝承の介在がよかったのかどうか・・。
◎口承のなかで、音声によって語り継がれる伝承は、様々なエピソードを累積しながら長編化されていく。英雄性を保証するはずの知恵が、逸脱してしまったのでは。もう一つ考えられるのは、父に疎まれるヤマトタケル、スサノオも同様に父に疎まれる。大君の御子が父に疎まれ、王権の世界から疎外され、翳りを持った人物像として、逸脱した知恵を働かせてしまう。

◎ヤマトタケルと二人の女性
◎ヤマトヒメ：叔母：相武（さがむ）の国造にだまされ野の中に誘い出され、火攻めに遭う。：その国造、火を野につけき。故、欺かえぬと知りて、そのおばヤマトヒメのあたえる袋の口を解き開けてみれば、火うちその裏にあり。ここに、まずその御刀（みはかし）を持ちて草を刈り払い、その火うちもちて火を打ち出で、向かい火をつけて焼きそけ、かえり出でて、みなその国造りらを切り滅ぼして、…難を逃れ火の中から出てくると、ヤマトタケルは自分を焼き殺そうとした相手を切り殺し焼いてしまう。

◎オトタチバナヒメ：后（いつの間にやら后がいた、突然の登場）：ヤマトタケルは焼津から浦賀水道を渡ろうとして、海峡の神の怒りにふれ行く手を阻まれる。
◎海を渡ろうとしたとき、神が波を荒立て、船をもてあそび、向こうに渡ることも退くこともできなくなった。「わたしが、御子の身代わりになって、海の中に入りましょう。御子はどうか、遣わされたまつりごとをなしとげ、大君に返りごとを申し上げてください」まるで神のもとに嫁ぐお姫様のように入水した。神にささげられた生贄、あるいは人身御供とみなすことができます。

057　安威川　 220622

◎安威川に来ている。ニュースでは、沖縄・奄美地方が梅雨明けだそうで、ここらあたり関西もしばらく前に梅雨入り宣言が出たなんて言いながらも、梅雨明けがそう遠くないのかな。きつい雨が二三日続く雨もあったけれど、今年の梅雨は、雨の日が少なかったように思う。

◎足イタが始まって半月ちょっと経った。一週間過ぎたころから大きい靴を履いて歩くようにしていた。ネットで買ったときには、「くそ～　ちょっと大きいか　小さいサイズと変えようか」と思ったが変えなくてよかった、足がゆったりの靴があってよかった、これを履いて10分20分歩きはじめた。そして何日か前から普段通りにジョギングをしている。どうも運動をした方がすっきり治っていくような気がする。今日も朝、隣の韓さん（整形外科医）に玄関先で、「どう　足　大丈夫・・」と声をかけられた。「おお　もうちょいやけど・・」と言いながら指で丸をつくった、両手で作ればよかったが片手がふさがっていたので指になった。「よかった　無理したら　アカンよ・・」といわれた。ところがまだ山には踏み込めない。登山靴を履いて短くても4.5時間坂の上り下り、「途中で痛くなっても　逃げられない　やめられない」もう少し我慢だね。山の中に入って、痛い、おかしい、SOSなんて、どうしようもないもんね。

◎昼の1時半、空には青空、白いふわりとした雲がふ～らふら。朝はどす黒く曇っていた、小雨も降っていた、昨日はアトリエの屋根がバシャバシャいうぐらいに強い雨が何時間も続いた。「これは梅雨だ　本格的な梅雨だ」と思っていたが今は、「雨雲は無い　昨日のじゃじゃ降りは　どこにいった」昼前ぐらいから晴れてきた、洗濯物を外に干した、「久しぶりに　昼間　走ろう」と着替えて出てきた。半袖のシャツで河原の風が気持ちいい。朝は長そでシャツでもちと寒いかな、という感じが、10時頃家族が起き出すころには、長そでシャツではちと暑いかなという感じになってきた。

◎先日のTV映像が印象に残っている。東京の市街地の大きな川、その二股あたりにでっかい樹が、大水でそのままの形で流れ着いて横たわっている。動物カメラマンの某氏、三脚付きのでっかい動画カメラを肩に担いでうろうろしている。「この木の場所は　いいんですよ　たくさんの動物が　この樹のまわりに寄ってくるんですよ」樹の枝やら幹やらの水の中には小魚が群れている。イタチが、タヌキがやってくる。鳥もやってくる、「あれはオオタカ　これはハヤブサ・・」「オオタカはね、土手の外に集まるハトを　土手の中まで追って　捕まえる」「捕まえたら　ここでは　食べないんだ」彼は嬉しそうに、「こっち　こっち」とカメラを誘導して、「ね　あった　あった」と地面を指差す。竹が茂ったやぶの中、ハトの羽根が散乱している。「オオタカはね　広い場所では食べないんだ　カラスに邪魔されて　ゆっくり食事もできない」「カラスがね　兄さんニイサン　おいらにも食べさせてよ・・」なんていうかどうかオレの勝手なセリフだが。「オオタカは　藪の中でも平気で飛べるが　カラスは竹藪のようなところは　飛ぶのが苦手」さすが動物カメラマン、動物の生態をよく知っている、嬉しそうに話している、定点観測の場にしている。

◎今はいている靴はもう棄てる寸前、これから雨の季節なので、雨用に、泥んこ用に何度か履いてから棄てようと思っていた、「ええい　棄ててしまえ」と思いきらなくてよかった。1年近くも履き、底はつるつるで穴が開きかけている、次の靴を履き慣らそうと1週間ほど新品を履いて、イテテになった。棄てようとしていたものを、さらに紐を緩めて履いている、これで丁度いい、棄てなくてよかった。ただこのぼろ靴を履いて買い物には行けないね、お店には入れない。イテテのこと、あれやこれやも加齢のせいか、何ごとも若いころのようにはすまない、安心してほったらかしにしていると身体がわがままをいってくる、歳だねえ。

058　古事記　250622
三浦祐之：5世紀を舞台にした物語、一般的には英雄と呼ばれない人物が対象です。＜宋の倭国伝：倭には五王がいて、全国統一を進めていた。大和朝廷の支配者は大君と呼ばれていた。前方後円墳と埴輪がさかん。

◎即位以前のオホサザキ（仁徳）と、実在性のたしかなオホハツセワカ（雄略）の登場。古事記執筆の100～150年前、「ほんの少し前」の話です。
◎オホサザキと異母兄弟二人との権力闘争・・。
◎若いオホハツセが、同母の兄である大君アナホ（安康）がマヨワに殺され、兄たちにどうするかと迫った。
◎オホハツセが兄のところへ、「あいつが大君を殺した　どうすればいいでしょうか」兄クロヒコは驚きもせず何もしようとしない。「おのれの弟が殺されたと聞いても　なにもしようとしない・・」襟首をつかんで外に引きずり出し、太刀を抜くやいなや兄のクロヒコを切り殺してしまった。オホハツセはその足で、もう一人の兄であるシロヒコももとに行き、同じように伝えたが、同じように驚きもせず何もしない様子。すぐさまシロヒコを外へ引きずり出し、穴を掘って生き埋めにしたのでそのまま死んでしまった。
◎王位継承の資格をもつものを次々片付けながら王として君臨していったオオハツセです。

◎マヨワ（オホサザキの孫）とハムレット
◎父を殺されたマヨワは、母と共にアナホの宮殿で暮らすことになる。大君は昼寝をしながら后に語りかけたが、その時七歳のマヨワが軒下で遊んでいた。「常々心にかかることがひとつある　そなたの子のマヨワだ父親を殺したのが吾だと知ったなら　おそらく邪まな心を抱くに違いない・・」盗み聞きした幼いマヨワは大君の寝ている時をうかがい、大君の太刀で首を打ち落とし、そのままツブラノオホミの家に逃げ込んだ。
◎父を現王に殺され、母は現王の后となり、王宮で暮らす7才のマヨワが、偶然に現王と母の会話を盗み聞きした。父を殺し母を奪ったのが現王だと知り、その夜、現王アナホの部屋に忍び込み、殺してしまった。
◎ハムレットは、王であった父を殺され、即位した叔父クローディアスの后となった母、ガートルードの変節に苦しみ、父殺しの犯人が叔父だと知って狂気を装い、オフェーリアとの恋も捨てた悩める青年ニ・・。最後は自分を毒殺しようとした継父に毒酒を飲ませて仇討ちをし、自分も毒酒を飲んで死ぬ。

◎オオハツセは軍を率いツブラノオホミ（葛城氏）の家を取り囲んだ。矢が飛び交う中、オオハツセは、「われが契りを交わしたおとめごは　もしや　この家にいますか」おとめごの親父のブラノオホミが出てきて、「娘は中にいます　どうぞ差し上げましょう」「なれど　私はあなたにお仕えすることができません」「私はあなたに勝てるはずがない　が　わたしを頼りに来てくださった　マヨワの御子がいるので・・」戦いが続き、負け戦のマヨワがツブラノオホミに、「「もうなすすべがない　われを殺したまえ」ツブラノオホミは御子を刺し殺し、自分も首を切って死んだ。

◎先生談：マヨワとツブラノオホミ、主君と臣下の理想像を滅びの美学とでもいう雰囲気が漂う。視線はオホハツセではなく、マヨワとツブラノオホミに注がれる。王家の復讐物語では満足できない人々の関与、5C後半に勢力を弱めた葛城氏という豪族の側に立った物語カモ・・。

◎先生談：古事記が語る伝承は、その分岐点で、王権を逸脱する者たちへの視線を抱かえこんで語られるのが特徴です。それはおそらく、王権の外側に位置した、あるいは、王権と外部の狭間に位置した語り手が、古事記の語りを抱かえこんでいるからです。

059　古事記　270622

三浦祐之：オケとヲケの兄弟は、履中天皇の孫です。五世紀末、弟のヲケは顕宗（けんぞう）天皇に。兄のオケは仁賢天皇に即位したと記紀では伝えている。実在性は不確かですが、古事記以外の民間伝承にも載っている。

◎彼らの父、イチノヘノオシハは、オオハツセ（雄略）に殺され身体を切り刻まれ、飼い葉桶に入れられて埋められる。父が惨殺されたことを知り、幼い兄弟は身の危険を感じて、山城、玖須婆、針間と逃げ込み、豪族シジムの家で、馬飼い、牛飼いとして使われていた。

◎シジムの家で新築祝いの宴があり、人々が次々に舞い、ふたりの兄弟も舞わされることとなった。兄が舞い、弟が詠（ながめごと）をした。同席していた針間の役人が、ふたりがイチノヘノオシハの御子だと気付き、都に報告した。大君の血統が途絶えようとすることに心を痛めていた叔母がふたりを都に召しだし、シラカ（清寧天皇）が没し途絶えようとしていた王位を継がせた。

◎弟のヲケが即位する直前、平群の豪族の臣：シビとの間の女をめぐる歌の掛け合い。父イチノヘノオシハの骨が埋められている場所を知る老女オキメの物語。幼い時、逃げる途中にふたりの食糧を奪った山城の猪飼に対する制裁の話。父を殺したオホハツセの墓を暴く話、などが続く。

◎ホムダワケ（応神）・オホサザキ（仁徳）から始まる河内：難波の王朝は、弟のヲケは顕宗、兄のオケは仁賢続いた時点で、河内王朝は途切れる。オケの娘シラカノイラツメに入り婿する形で、ヲホド（継体天皇）に続く。

◎下記は、詠（ながめごと）という歌。新築祝いの舞と歌、オレもかつて、こういう歌を、新築の席で、新築を祝い、主人を持ち上げ、めでたいめでたいと、歌っていた人の顔を思い出す。この歌で、ヲケとオケは最後の四行で自身の身分を名乗っている、歌っている。少し違うがこの歌は日本書記にも、播磨の国風土記にも出てくる。新築祝いなどの唱え言が、シャーマン的な芸能者によって伝えられている。乞食者：ほかひびと：と呼ばれる芸能者がいた。

物部の　我が勢子が	武士（もののふ）である　我が御子が
取り佩ける　太刀の手上（たがみ）を	腰に取り佩いた　太刀の柄には
丹画（にか）につけ	赤い色にて絵を描きつけ
その緒は　赤幡を載せ	緒には　赤い幡をつけ
赤幡を　立てて見れば	赤い幡を　立てて見渡せば
五十（い）隠る　やまの三尾の	奥深く籠る　山の尾根に立つ
竹を　かき刈り	竹を刈り取り
末押し　靡（なび）かすなす	竹の末を押し付け　靡かせるに似て
八絃（やつお）の琴を　治め賜ひし	平らかに天の下を　治めなされた
伊耶本和気（いざほわけ）の	イザホワケの
天皇（すめらみこと）の御子	大君の御子
市辺（いちのへ）の	イチノへの
押歯王（おしはのおほきみ）の	オシハの御子
奴末（やつこすえ）	われら末にて

◎先生：アイヌの英雄：ユーカラの主人公：ポイヤウンペ：同じような歌では・・と：両親を亡くした孤児。悪漢たちと戦い続ける妖精の英雄。語り手や聞き手といっしょに戦う明るいヒーローであり続ける。

060　たたら　280622

◎たまたまTVを見ていた、「え　これは　たたらの画面　じゃないか・・」1時間番組の半分ぐらいが残っていた、食い入るように画面を見た、「これがたたらか　実際にやっているところを　長時間番組で見れるとは・・」おおいに感激した、素晴らしい、これが見たかったのだ。

◎50歳代の頃、「人権問題啓発会　の　バスツアーに参加してくれ」ということで奈良県橿原市付近の“大久保地区”というところに行った。当時、“人権問題”とは“同和問題”を話し合う、“差別区別をなくそう”というような集まりだろうと思っていた。

◎“大久保地区”とは、その近所に宮内庁指定の天皇陵がある。陵の上部に穢多部落があった。明治の頃の国会で、「天皇稜の上部に　奴らの村がある　奴らの便所があり　墓がある　汚物が　下流の御陵を　穢していいものか・・」大演説をぶったものがおり、「奴らの村を　移転させろ」と大号令が下り村ごと下の方に移転した。バスから降りたところはきれいに整備された村、個々の家もオレが居る茨木のちんけな家々に比べなかなか立派なものだった。大久保の村人たちは穢多と呼ばれた人たちであった。その当時は経済的にも恵まれていたが、一昔二昔前までの差別のされよう、貧困、無学、大変な状態だったと察しが付く。

◎それ以来、人権問題が好きになり、公園や講座にも出席していった。市役所の人権問題にも関わったが、そちらの考え方の方向より、本で読む民俗学に興味をもった。今さかんに読んでいる古事記では、「豊葦原の瑞穂の国：神意によって稲が豊かに実り栄える国」という通り、日本では、当時から最近まで稲作が一番大事なものとされ、その他の作業が低くみられていた。

◎民俗学は柳田国男が出発点のように書かれているが、それ以来いろんな人たちがいろんなことを調べ、なかなかに面白いが、現代は日本国中が均一になってきて、お国自慢やらがなくなり、どこにいっても同じ風景になってきたのはつまらない。お化け・妖怪の話。山の民、海の民の話。修験道や山師の話。神道、仏教、呪術の話。穢多、非人の話。こんな話が次々出てきて面白く読んだが、すべてが過去の話だった。鉱山の話も、かつて日本国中に鉱山の穴があったらしいが、今はいくつかの鉱山が細々営業しているぐらいかな。そんな中で、中国地方でたたら製鉄がさかんだったことを知った。砂鉄とは？木炭とは？たたらとは？玉鋼とは？文字で読み写真では見るがなかなかにわかりにくい。

◎何年か前に、「日立金属に勤めていた　出雲でたたらをやってる　見に行ける」という情報を聞いたがその後コロナ禍で行けなかった。今見たTV では、青い作務衣のようなものを着ている人たち、日立のマークの入った帽子を被っている。「あれれ　これじゃないかな　彼が言っていたのは・・」

◎一回のたたら製鉄は三日間かかる、三日間火を燃やし、木炭と砂鉄を徐々に入れていく。やけどで赤くなった20～30人ぐらいのおっさん連が動き回って働いている。

◎炉は1トンラックの荷台ぐらいの大きさだった。風は近代送風機械が使われていた。

◎急流に岩石を流し込み、砕け流れた泥の中から砂鉄が採れる。鉄穴（かんな）流しという。

◎木炭は普通の木炭を使っていた。